

# 下関市立大学広報



海峡の英知。未来へそして世界へ。

公立大学法人

## 下関市立大学

Shimonoseki City University

2019年3月1日 第87号

発行：下関市立大学広報委員会

〒751-8510 下関市大学町2-1-1

TEL.083-252-0288

FAX.083-252-8099

<http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/>

平成30年11月学内合同企業研究会・厚生会館3階ホール

## 国際交流

### コリアンスピーチコンテストを終えて

国際商学科2年 加悦 優莉

(兵庫県立豊岡高等学校出身)

平成30年12月12日(水)に、「第14回コリアンスピーチコンテスト」が開催されました。私は『私が韓国語を学ぶ理由』というテーマで弁論の部に出場しました。弁論大会に出場するのは初めてでしたが、ありがたいことに最優秀賞をいただきました。原稿作成から発表を終えるまで、非常に多くの学びがあった大会でしたが、これを通して私がどのようなことを発見したのか、お話ししたいと思います。

一つ目に、「韓国語」という本気で打ち込める好きなことを見つけました。私は大学入学と同時に、かねてから興味のある韓国語の学習を本格的に始めました。はじめは、新しいことを覚えて使えるようになっていくのが楽しくてのめりこみましたが、ずっと前向きな気持ちで続けられることはありませんでした。レベルの高い学生に圧倒されたり検定や留学の試験にも落ちたことで何のために韓国語を学んでいるのかわからなくなり、勉強をやめてしまおうと思ったこともありました。それでも、今なお私が続けているのは、韓国語を学ぶことも話すことも楽しく好きだからです。かつての苦い経験を凌駕する会話ができた時の喜びや、自分の成長を感じる喜びがあるからこそ学び続けることができます。

二つ目に、目的に向かって努力し、達成できる自分を発見しました。今回、「最優秀賞をとりたい」と目標を掲げて練習してきたことが実りましたが、恥ずかしながら、私が努力してこのような結果をつかんだのは初めてでした。今までは成功体験がなかったので「自分は一番になれるような器ではない」と諦めていました。好きな分野である韓国語ではその可能性も十分あるのだと自信を持てるようになりました。このように誰にでも輝ける場所は必ずあるので、そこで努力することが大切だと思います。

今回のスピーチコンテストを通して、以上のような新しい自分を発見することができました。しかしこれは序章に過ぎず、すべきことはまだまだたくさんあります。これからもさらなる成長のために、日々研鑽を積みしたいと思います。



## 就職支援

### 就活における早めの情報入手と行動

教授 柳 純

(キャリア委員会委員長)

現在、4年生の就職内定率は96.6% (平成31年1月31日現在)となっており、昨年の同時期のデータと比べるとほぼ同水準を保っています。ここ数年の「売り手市場」の状況は継続しているようですが、今年度は昨年度よりも学生の内定取得状況の出足が鈍かったものの、さらに前倒し感が強まった印象を受けました。情報収集を早めに行い、業界研究や面接試験への対応をしっかりと行った学生が、複数社から内定をいただいているように見受けられました。したがって、早めの情報入手と行動が就活の明暗を分けるポイントと言えるでしょう。

新しい年度が始まろうとしています。3年生においては、すでに就職活動が始まっています。毎年5月のゴールデンウィーク明けに開始する「就職ガイダンス」、夏期休暇期間を利用した「インターンシップ」、11月中旬に開催している「合同業界研究会」等のスケジュールを経て、学生の就活が本格化するのがこの時期です。しかし、「売り手市場」だから内定は一つぐらい取れるだろう、皆と一緒に行動をしていれば大丈夫だろう、まだ就活は始まったばかりで自己分析や面接の練習をする時間は十分にあるなどの考え方は通用しません。

さて、本学における学生へのキャリア支援は「キャリアセンター」を中心に行っています。例えば、対象学年や時期で異なりますが、とりわけ3年生を中心とした就職ガイダンスから模擬面接、個別就職相談、エントリーシートの添削指導等、学生の卒業年度に向けた就業力向上を目的としたプログラムの実施、また業界情報の収集・提供、企業の求人情報のファイリング等を行ういわゆるキュレーターとしての機能も担っています。キャリアセンターを利用しない手はありません。

最後になりましたが、学生の皆さんにおいては、自らの将来を切り拓くために、早めの情報入手と行動を心掛けるとともに、今何をすべきかを考え就活に臨んでください。そして、キャリアセンターをうまく活用することで希望する職業・就職先に少しでも近づけることを願ってやみません。(内定先一覧 P.2参照)



就職支援

2018年度内定先一覧 (2018.12.28現在)

Table with 6 columns listing job offers from various companies and organizations. Columns include categories like '金融・保険', '建設・不動産', 'サービス', '製造', '情報・通信', and '公務'. Each entry lists the company name and the specific position offered.

## 就職支援

## 学内合同業界研究会に参加して

公共マネジメント学科3年 穂山 ひと美  
(長崎県立長崎北高等学校出身)

私は、平成30年11月19日(月)から4日間にかけて行われた学内合同業界研究会に参加し、興味のある業界だけでなく、今まで知らなかった業界や企業をまとめて知るよい機会になりました。

この研究会で「企業に自分をアピールすること」を目標に参加しました。参加企業に対して、傾聴姿勢で質問をしっかりと行うことで「やる気」を伝えるように心がけました。この心がけで臨んだインターンシップで、名前や顔を覚えていただいていたことが度々あったためです。人事の方は、質問ややる気を持つ学生に真摯に向き合ってくれます。実際に質問をして得た情報というのは、就職活動を勝ち抜くための大切な武器になると思います。これからも積極的に質問を続けていきたいと思っています。

今回の学内合同業界研究会では、企業や業界を知るとともに、人事の方との接し方、就活軸を考える上での幅広い知識と考え方を学ぶことができました。今後も、自分の軸を大切に、就職活動を有意義なものにしたいです。



## PBLに参加して(山口県花卉園芸農業協同組合)

経済学科3年 岩尾 真実子  
(大分県立中津北高等学校出身)

私たちの活動のテーマは、下関の花卉園芸農協の方が作られている『観賞用かぼちゃ』の販売促進を行うというものでした。今回私たちが行った主な活動は、ハロウィンかぼちゃランタン作りのイベントの広報活動の拡大とイベントスタッフとしての補助です。

今回の活動の目的は自分たちがどうしたいかよりも、農家の方々にとってより良い結果が得られることが重要だったと思います。行動の目的を定めることの大切さと、最後まで目的を見失わないように行動することの難しさを学ぶことができました。

今回はイベントの周知という目的を立てましたが、これをはっきりとさせていなければいつまでも話がまとまらず、行動をとることができなかったのではないかと思います。チームの雰囲気作りやスケジュール管理など、今まで学んできたことを活用してPBLの活動を進めることができたので、今回学んだことも今後課題を解決する上で十分に役立てていきたいと思っています。



## 4大学合同企業研究ワークショップに参加して

国際商学科3年 轟木 康陽  
(福岡県立香住丘高等学校出身)

「来て良かった」この感想を伝えたい。私の初めての就職活動はこの「4大学合同企業研究ワークショップ・BtoB企業を斬る!」でした。このイベントではBtoB企業とは何か、どういう人材が求められるのかを他の大学の学生と企業の人事採用担当の方とワークショップ形式で考えていくイベントでした。

私がこのイベントで得たことは大きく2つあります。1つは、就活に対する危機感です。参加するまでは、「なんとかなる」「まだ周りも就職活動を始めていない」と考えていました。しかし、実際に参加してみると、既に就職活動を始めている学生と出会い、自分の就活に対する意識を高める機会になりました。2つ目は、自分の視野の狭さに気づき、新しい業界への興味を持ったことです。今まで知らなかった業界の企業の方の話聞くことで、やりがいや楽しさなど、自分が働いている姿を想像できました。他の業界の話も聞いてみたいと感じました。

この経験を生かして、納得のいく就職活動にしたいです。



## 自著を語る

連載企画

潜伏キリシタンの二百年の移住と  
山海の教会の誕生

教授 叶堂 隆三

『カトリック信徒の移動とコミュニティの形成—潜伏キリシタンの二百年—』(九州大学出版会)を日本学術振興会の研究成果公開促進費の交付を受けて、昨年9月、出版することができました。

1997年、U.ベック・A.ギデンズ・S.ラッシュの『再帰的近代化—近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理—』(而立書房)を翻訳しましたが、実は、分担のラッシュの美的コミュニティの議論が難解で、理解できないままの翻訳でした。十数年後、コミュニティの基盤が文化であるという彼の主張が、突然、腑に落ちました。文化を基盤にする宗教コミュニティに関心を抱いたのは、こうした経緯です。ちなみに、映像文化もコミュニティの基盤の一つとして社会学の対象であるという思いから、現在、映画に興味を抱いています。

なお、昨年3月に本学の出版助成を一部利用して、『「山の教会」・「海の教会」の誕生』(九州大学出版会)を上梓しました。先の出版ですが、本書のスピノフです。



## 国際交流

## オーストラリア留学を終えて

国際商学科3年 森本 健太  
(兵庫県立宝塚北高等学校出身)

約1年間の派遣留学を終え、振り返ると英語だけでなく、精神面で成長できたと感じています。自分と真剣に向き合えたこと、異なるバックグラウンドを持つ友人たちと机を並べて高い水準の講義に食らいついていったことは私が留学で得た財産です。当初、常に自分の意見が求められる講義スタイルに圧倒され何もできずにいました。しかし、日々向上していく他の国の留学生の姿勢がモチベーションとなり徐々に発言回数も増えていきました。現地の学生に交じって発言することで英語に自信がつかしました。留学中の一番の思い出は、何気ない時間を異国の友人らと過ごせたことです。彼らとの食事やイベントに参加して楽しんだことを思い出すとブリスベンに戻りたくなります。留学をサポートしてくれた家族や友人、そして1年次から面倒を見てくださったサリバン先生には心から感謝しています。

最後に、海外での生活は辛いことが多々ありますが、そのような経験をどれだけするかで今後の生き方は変わると思います。留学を通して多くのことを学んでください。



## 木浦での留学を終えて

国際商学科3年 永中 莉緒  
(広島県立五日市高等学校出身)

平成30年2月末から12月まで、交換留学生として韓国の木浦大学校に留学しました。小学生の頃から韓国の文化に興味があったため、不安な気持ちが全くなく期待する気持ちからのスタートでした。しかし、未熟な語学力のため、うまくいかないことも多くありましたが、周りの方にたくさん助けられました。楽しいこともあれば、辛いこともたくさんありました。この留学で韓国の文化についてたくさんのことを学びましたが、文化の違いでたくさん傷つくこともありました。それも文化の違いだからと受け止めるのではなく、お互いの文化に誇りを持ちながら理解していくことの大切さを学びました。10か月という期間は長いようでとても短かったです。それは、木浦大学校でたくさんの方に出会い、毎日充実した生活を送ることができたからだと思います。この出会いを忘れずに今後に生かしていけるように頑張りたいと思います。



## 日本語スピーチコンテストから学んだこと

特別聴講学生 辺 海納  
(中国・青島大学から派遣)

私は、平成30年11月1日に開催された「第6回日本語スピーチコンテスト」に出場しました。スピーチのテーマは「防災対策から感じた命への尊厳」です。訪日研修で、「そなエリア東京」という防災体験学習施設を見学し、災害にまつわる知識や歴史を学びました。今まで自ら体験していなかった地震や津波などの怖さを学び、人間の命を尊ぶ姿勢を感じました。そのような災害に挫けない精神や防災対策の知恵を世の中の人達に伝えたいと考え、このテーマを選びました。

来日したばかりで、日本語や生活に慣れていませんでしたが、日本語を鍛えるために出場することを決めました。原稿の推敲では、文法のミスや発音の間違いが多かったのですが、先生方は何度も丁寧に指導してくれました。発表の順番は最後だったので、前の出場者たちの素敵な発表に驚いて緊張してきました。しかし、先生方や友達に報いるためにも原稿を持たずに発表しました。結果、最優秀賞を頂くことができ、本当に嬉しかったです。これを機に今後も日本語の勉強に励んでいきたいと思っています。



## 中国語が与えてくれたもの

国際商学科3年 山西 あみ  
(徳島県立脇町高等学校出身)

平成30年11月29日に開催された第10回中国語スピーチコンテストに出場しました。私は今回弁論の部に参加し、1年次からの中国語の学習に加え、1年間の留学を通して感じた「中国語の持つ力」という題材でスピーチをしました。

その内容は、「私は中国語の学習において語学力だけではなく、人との繋がりがや諦めない心、積極性も身につけられたと思っています。約3年間の学習の中で悔しい思いを何度もしました。また、実際に海外で生活をして、自分の能力の低さを身をもって感じました。しかしそのような経験があったからこそ、もっと積極的に現地の人々と関わらなければいけないと思い、結果的に現地の友達や思い出もたくさん増やすことができました。」というものでした。

スピーチ終了後の質疑応答の際「どのように日中間の交流に尽力するか」という質問に、「留学生と積極的に関わり、手助けをする」と答えました。留学先で私は現地の学生にお世話になりました。それを今度は下関に来る留学生に返していけたらと思っています。



## 国際交流

## 餃子の縁、日中の縁

経済学科1年 陳 小蘭  
(中国・四川省出身)

平成31年1月12日(土)に、SCU国際交流会館で第11回「食・見・交・群～餃子パーティー」を開催しました。下関市立大学の学生だけではなく、大学の職員の方、各国の留学生、社会人、子供を含む48人の方々に参加いただきました。今年は参加者をグループに分けて、各グループに上手に餃子を作れる中国人留学生を配置しました。皆、和気合々と作りました。顔も体も小麦粉まみれになりました。三角形や小籠包風のものなど、ユニークな形の餃子もたくさんできました。

今年はあえて、中国の伝統的な倒福(「福」の字を書いた赤色の紙を上下逆さまにしたもの)で会場を飾りました。このような中国の春節の雰囲気になりながら、中国の伝統的な食文化を体験することは皆にとっていい思い出になったと思います。

餃子パーティーを通じて、より多くの人に中国の文化に興味を持ってもらいたいです。「餃子がおしかった、来年も参加したい。」という声は、このようなイベントを開催し続ける原動力になりました。



## 「日本にいながら世界を知ろう!!」に参加して

経済学科2年 高本 千菜美  
(山口県立岩国高等学校出身)

平成30年12月19日(水)に開催された「日本にいながら世界を知ろう!!」に参加しました。今回は、木浦大学(韓国)から交換留学生として下関市立大学で学んでいる李漢蔚さんが、母国の事情を紹介しました。韓国と日本の似ているところや異なるところ、木浦大学と下関市立大学の違いなどをたくさん知ることができました。私は中学生の頃から韓国に興味を持ち韓国に憧れていたので今回このような機会に恵まれてとても嬉しかったです。

今まで韓国は日本と似ているところが多いと思っていましたが、伝統的な文化は違うところが多いと感じました。最近は韓国ブームが起きているといわれるほど、日本に韓国の流行りのものが多く取り入れられており、韓国に関心を持つ人も増えています。たくさんの人に今の韓国のことだけでなく、伝統的な文化にも触れてみてほしいと思いました。

木浦大学のイベントや韓国の大学生の過ごし方などを聞き、とても楽しそうで羨ましいことが多かったです。今回のイベントを通してさらに韓国への興味が湧き、より詳しく知りたいと思いました。



## 日本文化の神髄を知ろう!!～海から学ぶ関門地域～

交換留学生 鄭 載澣  
(韓国・木浦大学から派遣)

今回、関門地域を海から眺望する体験をしました。日本では船に乗ったことがなく、とても興味深く楽しみました。船に乗るとそこに広がる美しい風景に、私は心地よくなりました。普段は見られない風景なので不思議な感じでした。海風に吹かれながらすれ違う風景を見ながら感傷に浸りました。しばらくすると関門という門を通り抜けます。この門の開閉によって、船がある場所の海水が反対側に抜けて、水位が下がり通行できるようになります。私はこの場面を見ながら面白くて珍しいと思いました。関門を出たら長州出島に行き、また船着場に戻ってきました。戻ってくるまでの時間は長かったです。新しい体験をして来たという思いで全く長く感じられませんでした。今回関門地域を船に乗って体験してみましたが、今まで感じなかった地域の特色を肌で感じることができました。本当に私にとって大切な体験で、忘れられない思い出になりました。



## 自著を語る

連載企画

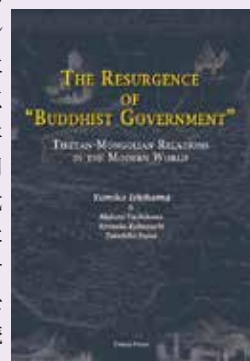
*The Resurgence of "Buddhist Government":  
Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*

准教授 橋 誠

「日本の歴史研究は世界でもっと評価されてもいい」

これが我々を本書刊行へと駆り立てた想いでした。日本の歴史研究が世界で軽視されつつあるという危機感と我々は優れた研究を行っているという自負がこの想いには含まれています。研究者は、日本語であれ何語であれ関連する研究には目を通すのが建前ですが、実際にはどんなに優れた研究でも英語でなければ世界ではほとんど読まれないのが現状です。

本書は、早稲田大学の石濱裕美子教授代表の科学研究費補助金(基盤研究C)による研究成果を基にしており、Union Press社から刊行いたしました。全9章、4人の著者からなる本書は、これまで大国の視点からのみ描かれがちであったチベットとモンゴルの歴史を、現代の国家の歴史に囚われずに、チベット仏教の視点から見直したものです。そして、西洋から持ち込まれた近代概念を無批判に過去に投影することなく、同時代史料を当時の文脈で解釈することに努めました。私も3本の論文を寄せており、編集にも携わりました。平易な英語で書かれておりますので、ご一読いただければ幸いです。



## 退任のご挨拶

### 理事長の退任にあたって

公立大学法人下関市立大学  
理事長 荻野 喜弘



平成25年5月1日付けで就任した公立大学法人下関市立大学の理事長職を平成31年3月末をもって任期満了で退任することになりました。平成22年の学長就任から数えますと、8年11か月の長きに亘って本学の運営に当たってきたこととなります。教職員をはじめ、多くの方々のご協力とご支援に感謝申し上げます。

学長としての3年間は本学の改革・発展のために微力ながら全力を傾注しました。主な改革をあげれば、教学面では、①教学推進会議の新設、②修士課程教育の充実(長期履修制度、社会人教育プログラムの開設等)、③科学研究費補助事業への申請件数及び採択件数の増加、④特定奨励研究費等の認定に審査方式の導入、⑤「国際交流基金」の再発足など。運営面では、①キャンパスの再開発、②教員評価制度の本格実施、③「下関市立大学教員の懲戒等の手続に関する規程」の制定、④ハラスメント防止体制の整備などでした。

平成25年5月の理事長就任にあたっては、理事長の職務はコンパスとマネジメントの役割であり、第2期中期計画こそが、コンパスの軸足であり、進路を示し、成果の基準となるものに当たり、マネジャーとしての理事長の役割は、第2期中期計画に基づき、ぶれない軸足でしっかりした方向性を示し、組織が成果をあげるようにすることだ、と挨拶のなかでふれました(「下関市立大学広報」第70号)。

この第2期中期計画(平成25年度～30年度)は私が学長として取り組んだ諸改革・諸事業をより発展させるものであり、その策定には学長として深くかかわった計画でした。本年3月末までの第2期中期計画の達成状況は、教職員の皆さんの努力などによって、ほぼ達成されると見込まれます。理事長として、コンパスとマネジメントの役割は果たすことができたのではないかと考えております。

とはいえ、課題も残っています。法人評価委員会による年度計画の評価は「概ね実施」がほとんどであり、「上回って実施」は僅少です。このことは、個々の大変な努力がチームの力として結集されていないことを示しているように思います。

この壁を突破するには、大学、各学科のあるべき姿、社会の期待に応える教育と研究とは何か、社会との連携を強化する方策などについて、全学をあげてそれぞれが立場を越えて真剣に議論することが求められています。そして、大学のために、学生のために、社会のために何ができるのか、学内の合意を形成し、大胆な改革と着実な改善の実行が肝要となります。なお、理事長として、このような取組に対して十分なリーダーシップを発揮しえたかどうかについては、今後自らの立場から検証したいと思っています。

最後になりますが、本学が公立大学の雄として、ますます輝きを増すことを祈念いたしますとともに、ご指導・ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 市大生活を振り返って

教授 櫻木 晋一



1996年4月に着任して以来、早いもので23年が経過しました。それまでの私の人生では全く縁のなかった下関で、いくつかの課題をもって大学教員として過ごし、無事にその大任を果たすことができたことに感謝しています。

まず教育面では、前任校が短大だったため、専門演習(ゼミ)を担当できることが楽しく、新しい日本史教育に力点を置くことを心掛け、今日までその姿勢を貫いてきました。着任当時は、ようやく日本史研究のなかで「史料論」が注目されてきた時期だったので、歴史研究の基礎にある文献や考古など諸史料の特性を中心に教えてきました。結果的に、歴史系の博士号を取得した研究者や、社会科の教員を育てることができたので、自分の歴史学に対する考え方や取り組みをいくらかでも後世につなぐことができ、嬉しく思っています。ゼミ運営では、ゼミ旅行やインターゼミ活動などを通して学生に知的刺激を与えながら、240名のゼミ卒業生を輩出しました。民間企業はもとより公務員として頑張っている者も多く、彼らが市大櫻木ゼミの卒業生として誇りをもって行動してくれていれば、それは私にとって望外の喜びです。

研究面では、イギリスのケンブリッジ大学に留学ができたことが、自分の研究者生活の質を飛躍的に向上させてくれたと思います。市大に着任して6年目の一年間、在外研究期間をもらったことによって、世界各国の優秀な研究者たちと接することができ、日本史の枠を越えた貨幣史研究を展開させることができました。自分の能力ではかなり無理をしている感じもありますが、出土銭貨という考古資料を使用しながら日本貨幣史研究を牽引し、発展させてきたという自負心はあります。特に、大英博物館から英語版『日本貨幣カタログ』を出版できたことで、「下関市立大学」の名を世界に向けて発信できたことは喜ばしいかぎりです。自分が提唱した「貨幣考古学」を学問の一分野として確立するために、後進の研究者育成にあたりつつ、自らもしっかりと研究を積み重ね、これからも精進していきます。

学内業務では、キャリア委員として学生の就職支援を10年ほどやってきたことが、「就職に強い市大」という高い評価を守るための一翼を担っていたものと考えています。さらに入試委員長や図書館長、学部長の職に就き、微力ではありましたが、市大の教育研究環境を整えていきました。思い起こせば、着任当初は研究室の電話が市外に繋がらない、研究室や多くの教室にエアコンがないといった、今では信じられないような劣悪な環境から、よくぞここまで来たものだと思います。第二武道場建築、図書収蔵庫新築、フリールーム設置などの課題をこなしてきましたが、まだまだ満足いくものではありません。私はこれで卒業しますが、これからの市大を創っていく教職員の皆様や学生諸君の更なる奮闘・努力を期待し、今後も市大を見守っています。

## 退任のご挨拶

### 退任にあたり

教授 濱田 英嗣



1998年10月に当時の東京水産大学（現、東京海洋大学）から下関に赴任の際、同僚・知人たちから「都落ち」するのは何故か、とよく質問された。本人は、大都会のごみごみしたところで生涯を終えるのはまっぴらごめん、妻も博多の女性で機会があれば福岡に戻りたいと言っていたので、東京脱出を実行しただけなのに、色々噂の一つになったらしい。

今振り返れば、東京の大学に勤務して霞が関（水産庁）の委員や委託調査が多く舞い込み、日本や海外に思う存分足を運べたと思う。それと、国の政策決定プロセスでは実質的に課長補佐が汗を流し、課長以上の上司はその精査にあたり、官僚にとって最も面白い時期は課長補佐時代にあると実感したこと、また彼らと農水省建物地下の食堂で缶ビールと干物で論議を戦わせたのも面白かった。一方、国の委員としての会議出席が増え、じっくり専門書を読むことや自主的研究会をする時間が次第に取れなくなるジレンマがあった。

下関に赴任してからは、こうした関係が次第に薄れ、自分の思う時間配分ができるようになり、精神的ゆとりから読書量は倍増した。一般的な経済書の他に多種多様な本を読むようになった。教養を補強するというよりも、例えば日本の養殖業の将来を考える際に、最終的には日本人に適した養殖経営、養殖戦略に行き着くから、日本の食文化、食考古学、民俗学や日本人論など、興味に任せて相当数の著書を読むことができた。経済学部配属され、読書量の多い先生方と知り合い、話を合わせるために意識的に読書量を増やした点も含めて、経済学部の恩恵を受け有難いと思います。

また、九州、山口の水産関係者とも深く付き合うようになった。彼らと付き合い合ってきたのは、日本経済全般に該当する「将来に対する不安感」であり、今後の水産業界のあるべき戦略を見極めたい、という点である。水産物市場が確実に縮小し、高価格販売が実現できる条件が喪失した中で、今後の経営戦略なり業界の生き残りをどうすればいいのか、彼らの悩みは相当に深い。

ただし、大学の教員として確とした正解があるはずもなく、しかし企業経営者として将来の経営不安を払拭する手立ては、「資金を蓄え」将来の不測の事態に備えるか、経営者としての「知識・知恵」をストックし、将来に備えるしかなく手立てがないこと、また「利益は差異から発生するので、経営戦略上の差異を強く意識、実践すること」、つまり、特効薬はなく常日頃の努力しか企業、業界が生き残る術はないことを強調し、現在に至っている。そういう意味では、むしろ、私が現場から数々の知恵、工夫を学ばせて頂いた。学内に学長による教員評価制度があるが、私はそれ以上に彼らから厳しく外部評価され、私なりに励んだと思っています。

下関市立大学を定年退職するにあたり、東京生活では味わえない奥深い体験をさせて頂き、私としては十分満足しています。これも色々とお配慮頂いた教職員の方々のお蔭で心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

### 退任にあたって

教授 横山 博司



市立大学への赴任は、1999年7月のある日の電話から始まった。9月に採用が決まり、10月1日に健康相談室長兼任としての赴任となった。8月には採用が決まらないにも関わらず教職課程申請のための書類作成を求められた。結局その時の短期間でのあわただしい引っ越しが今になってたたっている。書類等の整理も何もないままに詰め込んできたために、現在撤収準備が大変なことになっている。前任校を年度途中で退職したために、前任校の授業もやるのが退職許可条件だったので、初めの半年は、下関と前任校の間を毎週移動しながら、2つの大学で週の半分ずつ生活しているという感じだった。

下関での初めの半年は、講義科目も少なく、主な仕事は相談室長としての学生相談であった。その当時、相談室は一部の学生がたまり場になっている嫌いがあり、その上、相談室は、特定の学生が行く場所というイメージがあったので、まずはたまり場になっていた一部の学生の行動を変えることと、特定の学生だけでなく誰でも気軽に相談に来れる場所に変えていった。そして、定期的にカウンセリングを受けている学生も含めて面接時間以外にもソーシャルスキルを身に付けさせるようにした。

行動科学・心理学を専攻した人間にも関わらず、大学での生活は前任校も含めて、一貫して経済学部配属してきた。初めは、自分の育った学部と経済学部では風土が全く異なっていたゆえに戸惑いも多かったが、今にして思えば、逆に経済学部配属にすることによって面白い研究もできたものと思われる。本来、ストレスや不安のコントロールや対人不安を研究課題としてきたが、経済学部配属したことで、ワークストレス研究では、同僚のアドバイスもあり、経済学的観点を導入して心理学的観点とは異なった視点を導入できた。これは科研の獲得につながった。それと、現在実施しているトラフグの消費行動に関する研究である。これも市大にきて同僚に誘われなければ、決して関わることはなかったであろう。むしろ今の研究の中心になっている。研究生活を始めたころのワクワク感が再び戻ってきたような気分である。今後は少し範囲を広げながら食に関する心理学的研究を趣味として行っていこうと考えている。大学での研究生活を振り返ると、自分の知的関心の赴くまま研究を行い世に問うてきたということであろう。自由に自分の関心のあることに時間をかけることができたのも大学に奉職したからであり、多に感謝している。

40年に及ぶ大学教員としての生活を振り返ってみると、自分が理想としていた道とはだいぶ違っていました。何とかここまで来れたのは、恩師、同僚、職員の皆さん、卒業生や学生、非常勤先も含めて、多くの人との人間関係に恵まれていたからと考える次第です。多くの方への感謝の気持ちを込めて、ありがとうございました。

平成30年度 秋季 大会等成績

サークル名	大会等名称	種目など	成績
準硬式野球部	中国地区大学準硬式野球連盟 平成30年度 秋季リーグ戦 1部 第36回全日本大学9ブロック対準硬式野球大会	中国地区選抜チーム選手に選出	優勝 濱田・中谷・森本
軟式野球部	平成30年度西日本地区学生軟式野球秋季1部リーグ戦		優勝 (西日本大会出場)
陸上競技部	第41回中国四国学生陸上競技選手権大会	男子100m	2位 石川 順典
女子バレーボール部	秋季山口県大学高専バレーボール選手権大会		準優勝
ソフトテニス部	山口県秋季学生ソフトテニス選手権大会 (男子) 山口県秋季学生ソフトテニス選手権大会 (女子) 山口県秋季学生ソフトテニス選手権大会 (女子)	下関市立大学Bチーム	2位
		下関市立大学Aチーム	1位
			1位 松岡・高森ペア
空手道部	第56回中四国大学空手道選手権大会 第62回全日本大学空手道選手権大会	男子団体組手 男子団体組手	3位 (全国大会出場) 出場
男子バレーボール部	第71回秩父宮賜杯全日本バレーボール大学男子選手権大会		出場
少林寺拳法部	2018年少林寺拳法全国大会 in ぐんま	組演武 大学生男子の部	山元・洪原

第73回国民体育大会出場



ラグビーフットボール(女子)  
河本 美希(公共マネジメント学科4年)



陸上競技(4×100mリレー)  
石川 順典(経済学科4年)

2019年度入試結果

本学において、11月17日(土)に2019年度推薦入学、特別選抜(帰国子女・社会人)、第3年次編入学の試験を、12月15日(土)に外国人留学生選抜の試験をそれぞれ実施しました。

学科	入試区分	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	倍率	
経済学科	推薦	全国	28	78	78	29	2.7
		地域	A	29	42	42	29
		B					
	帰国子女	2	0	-	-	-	-
	社会人	2	0	-	-	-	-
	外国人留学生	若干名	14	13	6	2.2	
	第3年次編入学	8	30	23	10	2.3	
国際商学科	推薦	全国	28	62	62	33	1.9
		地域	A	29	39	39	29
		B					
	帰国子女	2	0	-	-	-	-
	社会人	2	0	-	-	-	-
	外国人留学生	若干名	24	22	12	1.8	
	第3年次編入学	8	27	20	10	2.0	
学科 公共マネジメント	推薦	全国	8	23	23	10	2.3
		地域	A	8	10	10	8
		B					
	帰国子女	1	0	-	-	-	-
	社会人	1	0	-	-	-	-
	外国人留学生	若干名	1	1	0	-	
	第3年次編入学	4	13	8	5	1.6	

※推薦入学の合格者数には第2、第3志望学科合格者を含みます。

平成30年11月～平成31年2月の行事 (予定を含む)

平成30年

- 11月 1日 下関市立大学弁論大会  
日本語スピーチコンテスト
- 10日 大学入学共通テスト試行調査(プレテスト)
- 17日 推薦・特別選抜  
(帰国子女等・社会人・編入学)
- 19日 学内合同業界研究会(～22日)
- 29日 下関市立大学弁論大会  
中国語スピーチコンテスト  
インターンシップ報告会
- 12月 3日 第1回交通安全講習会
- 7日 鯨資料室聞き取り調査
- 10日 第1回リーダーシップトレーニング(～11日)
- 12日 下関市立大学弁論大会  
コリアンスピーチコンテスト
- 13日 共同自主研究発表会  
PBL中間報告会
- 15日 外国人留学生選抜
- 22日 冬季休業(～1月6日)
- 29日 学内一斉休業(～1月3日)

平成31年

- 1月 7日 授業再開
- 10日 第3回下関フグを活用した  
インバウンド消費活性化検討委員会
- 11日 第2回交通安全講習会
- 12日 食見交群～餃子パーティ～
- 18日 大学入試センター試験準備(全学休講)
- 19日 大学入試センター試験(～20日)
- 23日 英語プレイメントテスト
- 25日 卒業論文提出日(28日)
- 29日 秋学期定期試験(～2月6日)
- 31日 大学院学位論文提出日
- 2月 7日 第2回リーダーシップトレーニング  
春季休業(～3月31日)
- 8日 第4回共創サロン
- 9日 大学院2次選抜  
鯨資料室シンポジウム
- 13日 学内合同業界研究会
- 14日 点検評価シンポジウム
- 16日 就活直前セミナー
- 25日 一般選抜(前期日程)

私のゼミ

連載企画

グループワークが引き出す  
個の力

経済学科 3年 川崎 大輔  
(長崎県立佐世保南高等学校出身)

田中ゼミでは、働くことに関する様々な問題について幅広いテーマで研究を行っています。田中ゼミでは、学生の主体性を重視しており、学生中心に作り上げられていくので、雰囲気はそれぞれ学年によって異なります。また、活動はほとんどグループで行うので、ゼミ生同士の仲も密なものになっていきます。これが田中ゼミの特徴です。ゼミの主な取り組みとして、3年の冬に他大学と合同ゼミを行います。夏頃に、研究のテーマを各班で自由に決めて、約3か月かけて各々研究します。その研究の成果を、この合同ゼミで発表します。この合同ゼミを通して、知識が増えるだけでなく、仲間との協調性も得られます。また、自分達で研究を進めていく上で主体性なども身につきます。準備期間は毎日遅くまで研究したりなど大変なことも多いですが、その分だけ仲間との絆や、達成感など得られるものもたくさんあります。私自身、この合同ゼミを通じてたくさんのものを得ることができました。この経験を生かして、今後、卒業論文の執筆や就職活動なども頑張っていきたいです。



学生団体新役員

【第15代学友会執行部】



会長  
松山 大成  
(国際商学科3年)  
副会長  
加藤 ひなた  
(国際商学科3年)

【第44代体育会】



会長  
工藤 良太  
(経済学科3年)  
副会長  
松山 大成  
(国際商学科3年)

【第35代文化会】



会長  
安藤 優志  
(国際商学科2年)  
副会長  
小松 真緒  
(国際商学科1年)

【第58回大学祭実行委員会】



委員長  
上別府 隼都  
(経済学科2年)  
副委員長  
小林 友輝  
(経済学科2年)

下関市立大学後援会のホームページが開設

【URL】

<https://www.web-dousoukai.com/shimodai-kouen/>

